

7月13日

■再生産戦線とは社会的生産力を奪い返し防衛する歴史的主体である

——軍事化する現代資本主義を超える歴史的主体

▼資本主義はどこで歴史的限界に突き当たるのか

現代資本主義の最大の矛盾は、生産の場とともに、再生産に現れています。だからこそ、それに対抗する主体もまた、生産と再生産の結合の場から形成されるのではないのでしょうか。

このFBでは、これまでたびたび、資本主義における利潤率の低下、金融化、レント資本主義、国家依存型資本主義、AI革命、そして軍事化という歴史的な流れについて見てきました。そこで明らかになったのは、現代資本主義が新たな蓄積基盤を求めて軍事化へ向かっているという事実です。

しかし、ここで一つの根本的な問いが残されています。そのような資本主義に対抗する社会的主体は、どこから生まれるのでしょうか。

二十世紀の社会主義運動や労働運動は、この問いに対して比較的明確な答えを持っていました。工場に集中的に存在する産業労働者が、資本主義を変革する主体であるという考え方です。この考え方は、十九世紀から二十世紀前半にかけて、大きな歴史的意義を持ちました。

しかし、二十一世紀の資本主義は、その当時とは大きく姿を変えています。今日では、利潤の源泉は製造業だけではありません。金融市場が巨大化し、レント資本が知識やデータを囲い込み、AIが一般的知性を収益化し、国家がその蓄積条件を支えています。こうした状況のもとでは、労働運動もまた、新しい歴史的条件に対応していかなければなりません。

私は、その鍵となるのが生産点に加えて、「再生産」であると考えています。

なぜ再生産なのでしょう。

再生産とは、人間の生命と生活を維持し、次の世代を育て、社会そのものを持続させる営みです。医療、介護、子育て、教育、食料、住宅、自然環境、地域社会、文化——これらはすべて、社会的存在としての人間が生き続けるために欠かすことのできない活動です。

ところが現代資本主義は、この再生産領域を新たな利潤獲得の対象として組み込んできました。医療は市場化され、介護は民営化され、教育は競争原理へと組み込まれています。住宅は金融商品となり、自然環境も収益の対象となっています。そして、データ化された私たちの生活そのものが、新たなレント収奪の源泉となっています。

つまり現代資本主義は、生産だけではなく、人間が生きることそのものを資本蓄積の対象へと変えているのです。ここに、現代資本主義の最大の特徴があります。

▼一般的知性と社会的再生産

私はここで、これまで別々に論じられてきた二つの問題を結び付けて考えたいと思います。

一つは「一般的知性」です。科学、教育、研究、文化、言語、AI。これらは、人類全体が共同で形成してきた知的成果です。

もう一つは「社会的再生産」です。医療、介護、教育、子育て、環境、地域社会。加えて、近年、猶予ならぬ気候危機として噴出している環境コモンを破壊から守る取り組みです。これらは、人間社会そのものを維持するための共同的な営みです。

一見すると、この二つは異なる問題のように見えます。しかし、現代資本主義のもとでは、両者は共通の運命をたどっています。どちらも社会全体が共同で築き上げてきた成果でありながら、巨大資本によって私的に囲い込まれ、レント収奪の対象とされているからです。

AIは一般的知性を囲い込みます。プラットフォームは私たちの日常生活を囲い込みます。金融資本は住宅を囲い込みます。そして資本は、介護や教育までも市場へ組み込もうとしています。

つまり、一般的知性と社会的再生産は、現代資本主義のもとで同じ構造的な攻撃を受けているのです。

この点を理解すると、再生産をめぐる運動は単なる福祉運動ではありません。それは、現代資本主義そのものに対抗する重要な軸として位置付けることができます。

▼再生産戦線という新しい主体

私は、この新しい対抗軸を「再生産戦線」と呼びたいと思います。

ここでいう「戦線」とは、特定の組織を意味するものではありません。また、単一の運動を指すものでもありません。

医療従事者、介護労働者、保育士、教員、自治体職員、農業従事者、環境保護運動、住宅運動、地域福祉に携わる人々、そして、これらの活動を支える住民自身。それぞれが異なる課題に取り組みながらも、「人間の生命と生活を支える社会的再生産を守る」という共通の目的によって結び付く可能性を持っています。

これは、二十世紀型の労働運動を否定するものではありません。むしろ、労働運動が再生産領域との結び付きを回復することによって、新たな社会的基盤を獲得していく道であると考えています。

私が再生産戦線を重視する理由も、そこにあります。

それは、軍事化する現代資本主義に対抗するための倫理的なスローガンではありません。現代資本主義、とりわけ軍事化された国家依存型レント資本主義の蓄積構造そのものから導き出される、歴史的・戦略的な対抗軸なのです。

▼再生産戦線とは「社会的生産力の防衛」である

軍事化する現代資本主義は、人類が共同で形成してきた社会的生産力そのものを、私的蓄積へ従属させようとしています。したがって、それに対抗する主体もまた、社会的生産力全体を防衛する主体でなければなりません。

このFBでは、これまで利潤率の低下から金融化、レント資本主義、国家依存型資本主義、AI 革命、そして軍事化へ至る歴史的過程を検討してきました。そこで明らかになったのは、現代資本主義が新しい利潤源を求めて、それまで生産の外部に存在していた社会的領域を、次々と資本蓄積の対象へ組み込んでいるという事実です。

この変化を理解するためには、生産力そのものに対する理解を広げる必要があります。

十九世紀の資本主義において、生産力とは主として工場、機械、労働力を意味していました。しかし今日、生産力はそれだけではありません。AI を動かす知識、大学が育てる研究者、学校教育、医療によって維持される健康、介護によって支えられる生活、子育てによって育まれる次世代、地域社会が蓄積してきた経験、自然環境が提供する生態系、そしてインターネットを支える通信網。これらはすべて、現代社会を支える重要な社会的生産力です。

しかも重要なのは、そのどれ一つとして、一企業だけによって形成されたものではないということです。それらは、社会全体の共同的な営みの積み重ねによって生み出されてきた成果なのです。

マルクスは『経済学批判要綱(グルントリッセ)』の中で、科学や知識が生産力となる段階を「一般的知性 (General Intellect)」として展望しました。そして今日、その展望は AI 革命によって現実のものとなりつつあります。しかし、その一般的知性は巨大プラットフォーム企業によって囲い込まれ、レント収奪の対象となっています。ここに、私たちが社民党千葉県連合の学習会第 6 回の講師としてお迎えした佐々木隆治氏が論じているレント資本主義の重要な特徴があります。

一方で、ナンシー・フレイザーは、資本主義が利潤追求の過程で社会的再生産そのものを破壊していることを指摘しました。シルビア・フェデリチは、女性のケア労働やコモンズの破壊を通じて、再生産領域が囲い込まれてきた歴史を明らかにしました。また、宇沢弘文は、市場原理だけでは維持することのできない社会的共通資本の重要性を論じました。

これらの理論は、それぞれ異なる問題を扱っているように見えます。しかし私は、それらを一つの歴史的過程として理解したいと考えています。

すなわち、現代資本主義は、一般的知性も、社会的再生産も、社会的共通資本も、コモンズも、すべてを私的蓄積へ従属させようとしているのです。

しかも、その最終段階では、それらは軍事化された国家依存型レント資本主義の中へ組み込まれていきます。AI は軍事 AI となり、クラウドは軍事データ基盤となり、宇宙開発は軍事衛星網となります。大学研究は安全保障研究へ組み込まれ、自治体 DX も国家全体のデジタル基盤の一部として再編されていきます。

つまり、軍事化とは単に兵器の問題ではありません。人類が共同で形成してきた社会的生産力全体が、軍事化する資本蓄積へ従属させられていく過程なのです。

だからこそ、私は「再生産戦線」という概念を提起したいと思います。

ここでいう再生産戦線とは、単なる福祉運動ではありません。それは、人類が共同で形成してきた社会的生産力そのものを防衛し、民主的に管理し、共同の利益のために発展させていく歴史的主体です。

医療を守ること。教育を守ること。介護を守ること。自然を守ること。地域社会を守ること。そして、「一般的知性」、すなわち人類が共同で生み出してきた科学や知識、文化の公共性を守ること。さらに、AI を公共の利益のために活用していくこと。これらは一見すると、それぞれ別個の課題のように見えるかもしれませんが。

しかし実際には、それらはすべて、社会的生産力を軍事化する現代資本主義から守るという、一つの歴史的課題によって結び付いています。

ここに、二十一世紀の社会運動を貫く理論的基盤があります。

私は、この主体を「再生産戦線」と呼びます。

それは単なる運動の名称ではありません。

軍事化された国家依存型レント資本主義に対抗し、人類が共同で築き上げてきた社会的生産力を守り、新しい社会へと発展させていくための、新しい歴史的主体の名称なのです。